

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：32602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720151

研究課題名(和文) ホーソンと南北戦争前アメリカのコンテクスト ジェンダーの観点からの研究

研究課題名(英文) Hawthorne and the Context of Antebellum America: A Study from a Viewpoint of Gender

研究代表者

藤村 希 (FUJIMURA, Nozomi)

亜細亜大学・経済学部・講師

研究者番号：30509237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀のアメリカ作家ナサニエル・ホーソン(1804-64)の生と作品の軌跡をジェンダーの観点から辿るとともに、作家の生きた南北戦争にいたる時代のアメリカの社会と文化の特異性を浮き彫りにすることを目的として、調査・考察を行った。特に、長らく概して失敗作とみなされ考察の対象外とされ、近年再評価が始まったばかりである1850年代後半以降の未完作品を含む作品群の南北戦争のコンテクストにおける考察を中心に据え、この時期の作品も視野に収めた作家の評伝研究をまとめる準備的作業を行った。

研究成果の概要(英文)：This study conducted research with the following two aims: to trace the life and works of Nathaniel Hawthorne (1804-64), a 19th-century American writer, from a viewpoint of gender and to illuminate the specificities of the society and culture of antebellum America in which Hawthorne lived. The study has placed a special emphasis on the reconsideration of Hawthorne's works after the late 1850s, including his unpublished works, in the context of the Civil War. These later works have long been neglected as failures but have come to be reevaluated in recent years. This study has prepared a new literary biography of Hawthorne that encompasses these long undervalued works.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ ナサニエル・ホーソン 南北戦争 ジェンダー 評伝研究 アメリカ文学 アメリカ文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 作家生誕二百周年を 2004 年に迎え、米国 Nathaniel Hawthorne Society、日本ナサニエル・ホーソン協会を中心に、作家の生と作品を多面的に再考かつ再評価する複数論者による論集の出版が相次いだ。その一つ、日本ナサニエル・ホーソン協会による『ホーソンの軌跡 生誕二百年記念論集』(2005)には、私自身、作家の全出版作品をホーソン家の家族史および時代背景との対照のもとに確認できるようにした年譜を寄稿している。その一方で、同協会機関誌『フォーラム』における渡辺利雄氏による書評(2006)が指摘する通り、これら複数論者によるそれぞれの視点からのそれぞれの関心に基づく論考をまとめた論集からは、「これが実在したホーソンだといえるホーソン像がどうも浮かんでこない」といった事態が起こりがちであったと言える。同時期には、殊に人種問題などホーソンの政治的態度に光を当てた Brenda Wineapple による優れた伝記 *Hawthorne: A Life* (2003)の出版もあったが、作家の伝記に作品への言及を補足的に付したのではなく、ホーソンの人と作品を中心に据え、その変化を初期から晩年まで辿った「これが実在したホーソンだといえるホーソン像」に迫る研究としては、Nina Baym の *The Shape of Hawthorne's Career* (1976)を超えるものは未だ現れていない。作家の全作品に言及しながら、Adam Smith らのいわゆる“commonsense philosophy”の影響を脱してロマンティズムを経てリアリズムへと至る作家の軌跡を活写したベイムの古典的研究も、しかし、しばしば度外視されてしまいがちな作家の人間としての変化に注意を向けた点で他の研究に数段勝ると言えるものの、文学史の潮流に合わせた直線的な変化の辿り方や、“Thwarted Nature: Nathaniel Hawthorne as Feminist” (1982)などの論考を経て米国ホーソン協会機関誌 *Nathaniel Hawthorne Review* の作家生誕二百周年記念号における“Revisiting Hawthorne's Feminism” (2004)でも繰り返されるホーソンをフェミニストであると主張する見解は、再考の余地の残るものである。

(2) 一方、私自身のこれまでの研究は、1999年の修士論文以来一貫して、ホーソンを中心とした19世紀アメリカ文学をジェンダーの観点から考察するものであった。ホーソンは、いわゆる「アメリカン・ルネサンス」の作家たちの中で例外的と言える、*The Scarlet Letter* (1850)のHester Prynneに見られるような複雑な女性登場人物の造形と、ピューリタン共同体の規範を体現する「父」との異性間・同性間の関係のポリティクスの描出を特徴とする。これまでの論考の中で私は、作品や手紙・日記などの一次資料の考察に基づき、Michael Kimmel, *Manhood*

in America (1996)を始めとするジェンダー研究を援用し、ホーソンの生と作品の核として、作家であるために自らを「男らしくない」と感じる同時代のジェンダー規範からの根深い逸脱感があり、それが作品では、時に芸術家である男性の劣等感情と他の職業の男性とのライバル関係、時に父権制下の共同体における弱者同士としての女性への共感、そして時にそのような共感にもかかわらず女性を弱者の位置に押し込めるそれ自体父権的なふるまいの間の、微妙な揺れ動きとなって現れることを明らかにしてきた。ホーソンは、ジェンダーが自然のものではなく特定の社会状況の下で構築される概念であることへの理解を年齢を重ねるごとに深めていく。しかしそこには、ジェンダー規範を下支えする言説空間に自らもありながら、時にそれに抵抗し、時にそれに加担し、時にそれを批判的に再考する、作家の一筋縄ではないか姿もまた、見て取ることができるのである。

Ph.D.論文を仕上げ、その一部をMLA大会における口頭発表(2008)、および日本英文学会英語機関誌 *Studies in English Literature* への投稿論文(2010)として書き直す過程で、Benedict Anderson の *Imagined Communities: Reflections of the Origin and Spread of Nationalism* (1991)以降発展してきた近年のナショナリズム研究 例えば、Robert S. Levine の *Dislocating Race and Nation: Episodes in Nineteenth-Century American Literary Nationalism* (2008) から新しい知見を得た。独立革命後、南北戦争に至る時代のアメリカは、新しい国を形成し統合するナショナル・ナラティブを喫緊に必要としていたが、この時代のナショナリズムを、従来のアメリカ文学研究が理解してきたようにかつての本国イギリスに対する一枚岩的な運動としてではなく、レヴィーンらが提唱するように国境内外の様々なレベルにおけるグループ間の「正統なアメリカ人」であることをめぐる闘争の結果であると見るとき、ジェンダーもまた「正統なアメリカ人」を規定するナショナル・ナラティブの一部を形成すると見ることができ、芸術家個人と共同体の関係として、先のホーソンの「一筋縄ではないか」ふるまいの意義を考察することも可能となると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような経緯のもとに、私が1999年以来行ってきた19世紀のアメリカ作家 Nathaniel Hawthorne (1804-64) に関する研究を発展させ、今回の研究期間終了後にその成果を研究書としてまとめ発表することを目指して遂行された。近年のジェンダー研究、ナショナリズム研究の知見をもとに、入手不可能だった一次資料の参照、初期に行った考察の再考と補足、手付かずであった作家の晩年についての調査と考察を行うこと

によって、ホーソンの生と作品の軌跡をジェンダーの観点から辿る評伝研究となると同時に、作家の生きた時代のアメリカ社会とその文化の特異性を浮き彫りにする研究ともなる、作家とそのコンテクストの双方の把握を目的とした。

3. 研究の方法

本研究の基本的な方法は、(1) 資料(アメリカやイタリアなど現地での一次資料や画像・映像資料を含む)の調査と収集、(2) 資料の分析、(3) 学会での口頭発表原稿としての取りまとめ、(4) 口頭発表へのコメントや新たに得た知見をもとにしたそれまでの考察の再考、(5) 論文執筆と学術誌への投稿や論文集での発表を、ホーソンの作品についてと、その社会的・文化的コンテクストについての双方において、実行することであった。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果として、まず、研究対象となるホーソンと同時代の文学作品、その時代のアメリカの歴史や文化に関する研究書、ホーソンが作品で取り上げるアメリカの植民地時代以来の歴史や、イギリスやイタリアを中心としたヨーロッパに関する研究書等の、書籍・映像資料の収集が行われた。

また、アメリカ・マサチューセッツ州セイラムの Phillips Library における一次資料調査結果の口頭発表および論文への使用許可の取得の他、同州コンコードの Concord Free Public Library、Old Manse、Minute Man National Historic Park、Concord Museum、同州ボストンの Boston Public Library、Harvard University 付属 Houghton Library 等で資料の調査と収集を行い、当該機関の司書や研究員との情報交換によって調査内容や方法について有益な助言を得ることができた。さらに、学会発表で訪れたイタリア・フィレンツェの Uffizi Museum や、アメリカ・シカゴの Newberry Library においても、情報の収集を行った。

これらは、口頭発表原稿・投稿論文の引用文献や参考資料として活用されたほか、今後ホーソンに関する研究書をまとめる上での基本文献となるものである。

(2) 本研究期間中に特に重点を置いた研究活動として、ホーソン晩年の作品および南北戦争に関する資料の分析があった。

ホーソン晩年の作品は、長らく概して失敗作とみなされてきた中で、近年再評価の動きが端緒についたばかりである。また私自身にとっても、これまで調査・考察を行うことができずにいた分野であった。そこで、本研究期間中に作家晩年の作品 *The Marble Faun* (1860)、“Chiefly about War-Matters” (1862)、“Northern Volunteers” (1862)、

Our Old Home (1863)、未完草稿群 *The American Claimant Manuscripts*、*The Elixir of Life Manuscripts*、および手紙やノートブック等一次資料を、まずは通読することを最優先とした。一方、この晩年の作品群を共通する問題意識に貫かれた一連の創作活動として通覧し評価したほとんど唯一の先行研究と言える Charles Swann の *Nathaniel Hawthorne, Tradition and Revolution* (1991)、そして、近年の再評価の口火を切った米国ホーソン協会機関誌 *Nathaniel Hawthorne Review* の 2009 年特集、“The Later Works of Nathaniel Hawthorne” と、そのなかでも特に Magnus Ullén と David Greven による序文“Late Hawthorne: A Polemical Introduction”といった研究を、繰り返し参照することになった。これら資料の分析を通して、いまだ多くは各論に留まるホーソン晩年の作品群の研究について、初期作品からの作家の変化・成長を中心に据え、ジェンダーの観点から再考・再評価する余地が十分に残されていることを確認できた。

ホーソン晩年の人と作品に大きな影響を及ぼしている南北戦争に関する研究の調査・分析を集中して行った。代表的な基本文献として、James McPherson の *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era* (1988)、Drew Gilpin Faust の *This Republic of Suffering: Death and the American Civil War* (2008)、Eric Foner の *The Fiery Trial: Abraham Lincoln and American Slavery* (2010)、戦時の大統領 Lincoln の講演集の他、古典的研究である George M. Frederickson, *The Inner Civil War: Northern Intellectuals and the Crisis of the Union* (1965)、Daniel Aaron, *The Unwritten War: American Writers and the Civil War* (1973) 等を参照し、南北戦争にいたる背景と、そのアメリカ社会および文化に対するインパクトの把握を目指した。また、ホーソンと同時代の作家たちに関する近年の比較研究として、Larry J. Reynolds の *Righteous Violence: Revolution, Slavery, and the American Renaissance* (2011)、Randall Fuller の *From Battlefields Rising: How the Civil War Transformed American Literature* (2011) からは、殊に得るところが多かった。

これらの研究書からは、後に述べるホーソン作品に関する考察のみならず、そのコンテクストとなる同時代作家の考察に際しても、有益な視座を与えられた。

(3) 上記(2)で述べたホーソン晩年の作品に関する3件、および *The Scarlet Letter* に関する2件の、計5件のホーソン作品に関する口頭発表を、日本国内およびイタリアとアメリカで開催された学会で行い、他国の研究者を含む複数の研究者と意見を交換する貴重な機会を得た。

殊に、ホーソン晩年の作品に関しては、上記(2)でも述べた通り、私自身がこれまでに考察を行わずにいた分野であった。そこで、学会発表の機会を捉えて、まずは作品ごとに考察をまとめる作業を優先した。その後、ホーソンの作家経歴に占める各作品の意義について、作家の初期作品も視野に収めた上での再考を、研究期間の延長を申請して得られた最終年度に集中して行うこととなった。

(4) 以上の通り、本研究期間中は1850年代後半以降のホーソン晩年の人と作品、そのコンテクストである南北戦争前夜のアメリカおよび作家が滞在したイギリス・イタリア等ヨーロッパの社会的・文化的状況に重点をおいて調査と考察を行った。それゆえ、*The Marble Faun*, “Chiefly about War-Matters,” *The Elixir of Life Manuscripts* に関する口頭発表を元に、同時期に書かれた *The American Claimant Manuscripts*, “Northern Volunteers,” *Our Old Home* といった作品を一貫した創作活動として再考し、論文にまとめる作業が中心となった。これらの論文は、現在にいたるまで、学会誌等への投稿を行っている。

その一方で、これらの作品の意義を浮き彫りにするために、*The Scarlet Letter* に至るまでのホーソンの初期作品の再考、それらにおける女性表象の変遷を概観する論文の執筆も行った。以上を元にまとめることを目指すホーソンに関する研究書については、現在、出版社と交渉中である。

また、同時代のコンテクストについてのもので、南北戦争前のアメリカのナショナリズムと関わるピクチャレスク・ツアーへのホーソンおよび同時代作家の参加のあり方の比較考察、同時代の代表的テクストである Ralph Waldo Emerson, *Nature* (1836) における男性性表象の考察や、女性詩人 Emily Dickinson の詩作品に見られる南北戦争への反応とその表現の考察等の論文発表を行った。

今後の研究課題として関心を抱くようになった南北戦争を通じたホーソンと他作家との影響関係を、20世紀の南部作家ウィリアム・フォークナーとの関係に探る論文のプロポーザルは、ホーソン没後150年を記念する日本ナサニエル・ホーソン協会の論文集に採用され、現在論文本体を執筆中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

藤村 希、「エミリー・ディキンソンのファシクル24と南北戦争」『英米文学』第75号(立教大学文学部英米文学専修)

2015、pp.1-18、査読有。

Nozomi FUJIMURA, “From Mrs. Hutchinson to Hester Prynne: The Development of Hawthorne’s Representation of Women” 『学術文化紀要』第23号(亜細亜大学総合学術文化学会)2013、pp.91-109、査読有。

Nozomi FUJIMURA, “Nature and the Logic of Emerson’s Man-Making” 『英米文学』第72号(立教大学文学部英米文学専修)2012、pp.1-15、査読有。

[学会発表](計5件)

Nozomi FUJIMURA, “At Odds with Home: Family, Community, and Belonging in Hawthorne’s Final Year,” MLA Convention, シカゴ(アメリカ)2014年1月11日。

藤村 希、「ナサニエル・ホーソンの南北戦争 “Chiefly about War-Matters” を読む」立教英米文学会、立教大学(東京都・豊島区)2012年12月15日。

Nozomi FUJIMURA, “‘Between Two Countries, We Have None At All’: Transatlantic Wars and the Whereabouts of Hawthorne’s Last Romance,” *Conversazioni in Italia: Emerson, Hawthorne, and Poe*, フィレンツェ(イタリア)2012年6月10日。

藤村 希、「“A Citizen of Somewhere Else” *The Scarlet Letter* における死者・共同体・ロマンス」日本アメリカ文学会東京支部例会、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)2011年6月25日。

藤村 希、「*The Scarlet Letter* と税関のワシ ホーソンにおける個人と共同体の関係再考」シンポジウム:アメリカン・ルネッサンス研究の新潮流、日本ナサニエル・ホーソン協会全国大会、西日本総合展示場(福岡県・北九州市)2011年5月21日。

[図書](計2件)

西谷 拓哉・成田 雅彦 編著、『アメリカン・ルネッサンス 批評の新生』(藤村 希「どこかほかの場所の市民」になること 「税関」の驚と『緋文字』における個人と共同体の関係」(pp.83-104)執筆担当) 開文社出版、2013年、446pp。

野田 研一 編著、『風景のアメリカ文化学』(藤村 希「ピクチャレスク・ツ

アーとアメリカ的主題 / 主体の形成
「1830年代のホワイト山脈」
(pp.105-127)執筆担当) ミネルヴァ書
房、2011年、288pp.

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤村 希 (FUJIMURA, Nozomi)
亜細亜大学・経済学部・講師
研究者番号：30509237

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし